

秋田市卸売市場に隣接する秋田市外旭川の上通地区。三浦孝市さんと鎌田兵悦さんは、上通生産組合などを前身に、大豆と水稻の栽培に長年取り組んでいる。手塩にかけた大豆「リュウホウ」は、令和3年の第144回と令和4年に開催された第145回の秋田県種苗交換会で、2年連続で秋田県知事賞・1等賞に輝いた。

### 長年励んできた大豆栽培

上通地区では、平成5年頃から大豆の集団転作に取り組んできた。米の凶作による一時的な中断などはあったものの、集団営農組合や生産組合を経て、現在まで大豆の栽培を続けている。平成12年には、JA新あきた大豆部会が始動。初代の部会長を務めた鎌田さんは、「JAの大豆部会が始まって機械化一貫体系が進み、集団で作業がしやすくなりました」と振り返る。今は、大豆の栽培に使用する農機はJA大豆部会のもものを使用し、稲作に関するものは2人で共用している体制だ。

### 湿害対策、土壌改良などを重ねる

以前は大豆のブロックローテーションを行っていたが、土壌や地形などといった元来の圃場条件に加え、大規模基盤整備が行われておらず暗きよが入っていないため、排水不良や湿害に悩まされてきた。現在は、毎年同じ圃場で栽培。長年にわたって水張りしていないことや明きよなどの対策を重ねたことで、地盤の排水能力を向上させた。

同じ圃場に作付けするため、連作障害に細心の注意を払う。雑草対策では、除草剤の散布と刈払機、鎌による刈り取りを入念に行う。「大豆が雑草に負けないように、使用する除草剤の組み合わせなどもよく考えて、こまめに防除しています」と三浦さん。鶏ふんと苦土石灰を毎年施用し、土壌改良も欠かさない。「鶏ふんを多く施用するようになってから、コンバインで収穫した時点で『豆につやが出ています』と感じるようになりました」という。

### 品質の高さがあらわれた昨年産

令和4年産の大豆は令和3年産より収

量は減ったものの、等級は全て1等と2等で大粒率も高く、高品質な出来となった。秋田県種苗交換会での受賞を、鎌田さんは「品種特有の粒揃いのよさがあらわれて、評価されたのではないかと感じました」と話す。三浦さんは「昨年は『量より質』の結果が出た年でした。今年も自然体で、賞のことを意識しすぎずに、品質のいい大豆の栽培に励みたいと思います」と、春作業を前に意欲を見せた。

三浦さんの圃場では、排水対策や土壌改良などを重ねて地力が向上し、連作でありながらも高い品質の大豆を生産しています。こまめな雑草処理や適期作業などといったいいねいな栽培管理が、2年連続の受賞に繋がったと感じています。



秋田地区営農センター  
清水 誠 センター長補佐